



**Data**

監督・脚本：セリーヌ・シアマ  
出演：アデル・エネル／ノエミ・メルラン／ルアナ・バイラミ／ヴァレリア・ゴリノ

## 👁️👁️ みどころ

肖像画を“生きた女”として描くためには、モデルが不可欠！また、モデルは人形ではないから、感情も表情も必要だ。他方、18世紀のフランスで、若い女性が肖像画を描く意味は？その目的は？

女同士の「同性愛モノ」の名作には『アデル、ブルーは熱い色』（13年）や『中国の植物学者の娘たち』（05年）等があるが、何と本作も中盤からその方向へ！画家もモデルも女同士だが、なぜ、この2人はそんな方向に？

あの時代には珍しい“自立した女”と過ごす濃密な5日間の中、“深窓の令嬢”は如何に変化（成長）していくの？2人のヒロインの会話劇を中心としたセリーヌ・シアマ監督の演出と映像美をしっかり観察したい。“44受賞&124ノミネート”の謳い文句にも納得！



### ■□■自撮り棒を初購入！あの時代の肖像画は見合い写真！■□■

旅行大好き人間の私は、当然カメラも大好き。そのため、高級一眼レフもいろいろ購入してきたが、フィルムからデジタルへの転換を中心に、カメラの変化は著しい。他方、スマホの登場とその撮影能力の向上によって、一眼レフは専門家だけの必需品に変わった感もあった。しかし、ミラーレスの進化による一眼レフの小型化と動画の広がり、そしてタッチパネルや自撮り棒の登場で、“自分撮り”のバリエーションが広がってきた。しかして、カメラのない時代の“自分撮り”はどうしていたの？

それは、マリアヌヌ（ノエミ・メルラン）がフランスのブルターニュ地方にある海の孤島に、貴族の娘・エロイーズ（アデル・エネル）の肖像画を描くためにやってくる本作導入部を観ればよくわかる。マリアヌヌにエロイーズの肖像画を依頼したのは伯爵夫人（ヴァレリア・ゴリノ）だが、そもそも、それは何のため？本作の主役はそれぞれ優雅なドレ

スに身を包んだ2人のヒロインだが、そのドレス姿を観れば、本作の舞台は18世紀だということがわかる。正確には1770年だそうだが、あの時代、若い娘が肖像画を描いてもらうのは、より良き結婚相手を選ぶためのお見合い写真代わりだったらいい。なるほど、なるほど。

しかし、マリアヌスが伯爵夫人から受けたオーダーは、エロイズには画家であることを隠し、散歩のお相手だと思わせうえで、隠れてエロイズの肖像画を完成させて欲しいというものだったからビックリ！それは一体なぜ？

## ■□■こりゃ一種の盗撮？完成品の披露は？■□■

新型コロナウイルス騒動禍が続く中、否応なくテレワークが定着し、それによって一種の「働き方改革」が進んだ。そんな状況下の2020年8月、総合人材サービス大手のパーソナグループが本社機能を東京から淡路島に移転すると発表したことに私は注目した。この本社機能の移転にはれっきとした理由があるが、伯爵夫人がなぜあんな孤島の崖の上に大きなお屋敷を構えているのかは本作ではさっぱりわからない。小舟を降りたマリアヌスが重い画材を肩にかけて崖を登っていく姿を見ると、こんな孤島での生活がいかに大変かがよくわかる。もっとも、そんな孤立した島、孤立した屋敷の中だからこそ、集中して画家のお仕事ができるメリットもあるわけだが・・・。

モデルなしで肖像画を描くのは難しい。マリアヌもそんな経験ははじめてだろうが、昼間にエロイズと接する中で得たいろいろなイメージを夜間にキャンパスにぶつけることによって、やっと肖像画が完成。エロイズは親の決めた結婚に従うだけ、という立場に心を閉ざしていたから、以前に雇われていた画家の前には決して顔を見せなかったらしい。そんなエロイズはマリアヌとの散歩の間にも決して笑顔を見せることがなかったから、マリアヌにとってエロイズは決していいモデルではなかったようだ。やっと完成した肖像画はまず伯爵夫人に見せるのが筋だが、そこでマリアヌは、「先にお嬢様に見せ、真実を告げたい」と頼みこんだから、アレレ・・・。それは一体なぜ？

本作は基本的にすべて会話劇だけで進行し、2人のヒロインの心理描写（の解説）は全くされないので、しっかりスクリーン上に集中して、2人のヒロインの揺れ動く心のサマを観察したい。

## ■□■なぜ完成品を自らボツに？そこから意外な展開に！■□■

今まで一緒に散歩するだけの友人として母親が連れてきたと思っていた女性マリアヌが実は画家で、夜な夜な秘かに自分の見合い用の肖像画を描いていたとマリアヌから直接聞かされたエロイズは、それをどう受け止めたの？近時の邦画なら、そこらの表現はオーバーアクション気味になってしまうのがオチだが、セリーヌ・シヤマ監督の演出と、貴族令嬢であるエロイズの態度はさすがに抑え気味。マリアヌのウソにエロイズがわずかに憤りの表情をにじませたのは当然だが、それを直接的に攻撃することはなく、「この絵は私に似ていません」と言い放っただけなのはさすがだ。もっとも、それによってマ

リアンヌの画家としてのプライドが大きく傷ついたのは当然。そのため、リアンヌはせっかくなで描き上げた肖像画を自らの手で消してしまったから、怒ったのは伯爵夫人。「描けないなら出て行って」とリアンヌに宣言したのは当然だ。

これによってクビにされたリアンヌが孤島から離れてしまえば、何の物語も成立しないことになるが、そこで意外だったのは、エロイーズが「私がモデルになる」と申し出たこと。そもそもお見合いのために肖像画を描くことに反発していたエロイーズが、今はなぜリアンヌが描く肖像画のモデルになることを承諾したの？それが、本作後半から意外な展開に移行していく最大のポイントになるので、その点における2人のヒロインの心理描写をしっかりスクリーン上から観察したい。

エロイーズの意外な反応に驚きながらも、事がいい方向に向かった(?) ことに納得した伯爵夫人は、用事で本土へ出るので、戻ってくる5日後までに絵を仕上げるよう指示したが、さあ、2人はこれから続く5日間をいかに濃密な時間にしていくの？

## ■□■なぜ2人は恋に？女の自立とは？あの時代に同性愛が！■□■

本作のチラシにもパンフレットにも、「映画史を塗り替える傑作！」「世界各国の映画賞を44受賞、125ノミネート！」「シャーリーズ・セロン、グザヴィエ・ドランら、今を煌めく映画人が大絶賛！」と書かれている上、映画関係者からの称賛の声がたくさん載せられている。たしかに、撮影(技術)の素晴らしさを伴った本作の素晴らしさは目を見張るものがあるが、本作後半のストーリーは、『アデル、ブルーは熱い色』(13年)、『シネマ32』(96頁)や『中国の植物学者の娘たち』(05年)、『シネマ17』(442頁)と同じような、女同士の同性愛の物語を伴ってくるので、それに注目！アカデミー賞監督賞受賞作になった『ブロークバック・マウンテン』(05年)、『シネマ10』(262頁)等のごく一部を除いて、私は男同士の同性愛の映画はノーサンキューだが、女同士のそれはどちらかという大歓迎！

しかし、本作前半の展開からは、なぜリアンヌとエロイーズの2人がそういう関係になっていくのかを理解するのは難しい。もちろん、大きな重しになっていた伯爵夫人が5日間本土に出かけたため、その5日間、お屋敷は召使のソフィ(ルアナ・バイラミ)を含めて女3人だけ。すべてに自由な時間が保証される中で、リアンヌは画家業に、エロイーズはモデル業に専念できるうえ、空いた時間ではカード遊びこうつつを抜かしたり(?)、文学論や音楽論で語り合うことも自由だ。あの時代の女たちは結婚の相手選びをはじめ、ほとんど自由がなかったから、こんな風に自由に文学論や音楽論に興じることなど、一度もなかったはず。既に男性経験のあることを告白していた、自由人であるリアンヌは、あの時代には珍しい“自立した女”だったが、それまでずっと“深窓の令嬢”で、束縛されてばかりだったエロイーズは、リアンヌと過ごす濃密な5日間で、大きく自立した女に変身していくことに。

その過程の中で新たに生まれたのが、エロイーズの自由な笑い。密かに夜な夜な描いて

いたころは一度も見たことがなかったエロイーズの様々な笑いを見て、マリアンヌはそのモデルに様々な注文を出すこともできたから、肖像画描きが順調に進んだのも当然だ。そして、そんな風に“本業”が順調に進む中、互いに魅かれあっていく2人が本作で見せる性愛表現とは？召使ソフィの妊娠が判明し、その処置のため2人が奔走する姿にもビックリだが、5日間限定ながら、マリアンヌとエロイーズが見せる本業と性愛のサマをじっくりスクリーン上で観察しながら、本作のすばらしさを確認したい。

## ■□■ 豎琴の詩人オルフェのギリシャ神話を知ってる？ ■□■

本作を観ていると、マリアンヌは冒頭、海に流された画材を拾うためザンブと海の中へ1人で飛び込んだり、重い画材を肩に背負ったまま1人で崖をよじ登ったり、その行動力とそれを支える運動神経はなかなかのもの。また、絵だけではなく、文学や音楽などにも幅広い知識・教養を有しているから、18世紀の女性としては珍しい“自立した女性”だ。もっとも本作のマリアンヌは、10月10日に観た『ある画家の数奇な運命』（18年）（『シネマ47』169頁）の主人公ゲルハルト・リヒターのような実在の画家ではなく、セリーヌ・シアマ監督が本作のために創作した人物らしい。

召使のソフィを含めた3人の女たちが過ごす濃密な5日間の中で印象的なのは、マリアンヌが朗読する豎琴の詩人オルフェとその妻ユリディスの物語と、その解釈について3人で議論するシークエンスだ。ヨーロッパではこのギリシャ神話は有名なものだが、日本人はその方面の知識に疎いので、多分あなたはそれを知らないのでは？その内容を知っているか否かによってこのシークエンスの面白さが変わるわけではないが、セリーヌ・シアマ監督の意図を把握するためには、せめてネット情報でそれを学んでおいた方が良いでしょう。

また、冒頭から孤島だとばかり思っていたのに、この島には大勢の人が住んでいたことや、島のお祭り(?)に集う女たちが歌う歌声のすばらしさにビックリ！その焚火の火がドレスの裾に燃え移るシーンがお見事なら、2人がはじめてキスを交わすシーンのアップでの撮影もお見事。さらに、召使のソフィが幼い女の子と赤子の男の子と戯れながら墮胎処置を受けるシーンも鮮やかというほかない。マリアンヌによるエロイーズの肖像画描きを中心に、3人の女たちが過ごしたこの濃密な5日間が、セリーヌ・シアマ監督と撮影スタッフの素晴らしい力量で描かれるので、本作ではそれをしっかり観察したい。

## ■□■ 作品の完成=2人の別れ！2人の数年後は？ ■□■

映画音楽の重要性は当然だが、本作ではヴィヴァルディの協奏曲「四季」の「夏」が、前半はマリアンヌが弾くピアノで一度、後半はマリアンヌとエロイーズが別々の席に座る音楽会のオーケストラで一度演奏されるので、その美しい曲に耳を傾けると共に、その間の2人のヒロインの大きな変化に注目！

エロイーズの肖像画を描くために島に招かれたマリアンヌは、伯爵夫人が戻り、完成品にOKをもらい、報酬を受け取れば、あれほど熱い性愛を交わしたエロイーズと別れることになる。さらに、お見合い写真代わりの肖像画を持って、エロイーズは伯爵夫人が決め

た男（貴族）の元に嫁いでいくのも当然。そして、結婚すればきっと子供も生まれることだろう。

しかして、セリーヌ・シアマ監督はエロイズの肖像画が完成し、激しい同性愛に陥っていた2人のヒロインが別れた後を、本作ラストでどのように描き、本作を締めくくるのだろうか？そんなことを考えながらスクリーンを凝視していると、本作ラストのあっと驚く長写しにビックリ！なるほど、こりゃチラシでの絶賛にも納得！

2020（令和2）年12月14日記